吉村はるか訪問記

災害ボランティアの竹川均さん
「避難先にフェリーを利用しては」

竹川 均（たけがわ・ひとし）
1955年生まれ。海上自衛隊を経て、30代で会社を興した。日本舞踊「藤間流」の名取として、「藤間加緑」を名乗る。北九州の文化芸術活動にも尽力。

吉村はるか（左）に、支援活動について話す竹川さん

北九州市小倉南区市丸の会社社長、竹川均さんは、大きな災害のたびに現場に駆け付け、ボランティア活動に汗を流しています。自民党第10区支部長の吉村悠が、竹川さんを訪ねました。（文中、敬称略）

吉村　何度も足を運んでいますね。

竹川　阪神大震災（1995年）を手始めに、これまでに10回ほど行っています。東日本大震災（2011年）では、自社の2トントラックに、食料品とともに、量販店で購入した大人用オムツ6000枚、赤ちゃん用4000枚を乗せ、福島県まで運びました。震災翌日に、福島県庁に勤めている知り合いから「オムツが足りない」と聞いたのです。熊本大震災（2016年）では、熊本在住の同級生から「水がほしい」と言われ、10トンの水を届けました。

吉村　いずれも地元の声を踏まえた行動だったのですね。

竹川　東日本大震災では、東北自動車道を利用するために、小倉南署で緊急車両として認めてもらい、震災4日後の3月15日に出発しました。その際、福島県から北九州市の病院に出張していた男性医師を便乗させてほしい、と警察から頼まれ、快諾しました。医師は交通手段がなくなり、帰れなくなっていたのです。

※竹川さん提供

新門司港からフェリーで東京港に行き、宮城県を経て、福島県災害対策本部があった福島県相馬郡新地町に入ったのは3月17日午後。まったく偶然ですが、医師の自宅は新地町だったのです。看護師の奥さんとの対面はドラマを見ているようでした。

北九州に帰りついたのは8月22日。往復の移動距離は2800キロメートルにのぼりました。

吉村　大学生時代、新潟中越沖地震（2007年）にボランティアとして入りました。翌年から2年連続で紫川が氾濫したこともあって、災害対策に強い関心を持つようになりました。県議（4期）時代は治水対策やがけ崩れ防止に力を入れました。

災害現場で、商品や通帳などが散乱し、放心状態の女性が白黒写真のアルバムが見つかると、手に取り、涙を流し、元気になったのを見たことがあります。家やお金だけでなく、思い出までも奪ってしまう災害の怖さを改めて痛感しました。劣悪な環境でも、懸命に汗を流す自衛隊員の活動ぶりにも感心します。

竹川　自衛隊の救援活動をもっと評価してほしいですね。災害時でも略奪も起きない日本人の姿にも頭が下がります。

吉村　同感ですね。これまでの経験をもとに、提言はありませんか。

竹川　災害に備え、国が大きなフェリーを所有したらどうでしょうか。現場近くの港に停泊させて、避難先や自衛隊員の宿泊先などに利用するのです。

吉村　貴重なお話し、ありがとうございました。

【発行者】
自民党福岡県第十選挙区支部
吉村はるか
後援会事務所

〒802-0802
北九州市小倉南区城野4-1-30
TEL:093-951-5757
FAX:093-951-5758

活動
発信中！